

最優秀賞

しろいからすのうみのおや

神奈川・慶應義塾湘南藤沢高等部 二年

平田 梨花

まず、大きくて暗い穴があるんだ。少年は言った。青白く痩せた顔に、  
涙みのある目が二つ。

「とてつもなく大きいんだ。地球の真ん中に太陽よりもずうっと大きな  
穴があいて、そのほつりを猫が跳び回っていてさア、あたりは草原なん  
だ、見渡す限りの草原、青々と生い茂ってざあざあいつて、分厚い霧で  
覆われてる。ソんで子供たちが蹴った白いボールが穴に落ちちやうんだ  
よ、すると穴の中から木が生えてくる、小さくて甘い香りがする木だよ、  
その香りに誘われた白い鳥は穴に落っこちるんだ、傑作でしょ？ 落っ  
こちるとき白い鳥はきつとこう思うよ、あア私もう一度この穴から出ら  
れるのかしらって」

夏の夕暮れ、汗と砂埃の匂いは旧図書室にもわずかながら漂っていた。  
西日が、可奈の睫毛をちりちりと焦がす。

じつとりとした後悔が、時間をかけて這い上がってきていた。あれほ  
ど行くなと言われていたのに。美由紀の、怪談でもするような語り口を  
今更思い出す。

可奈の通う高校には、図書室とは別にこの旧図書室がある。何年も借  
りられていない本が放り込まれた場所だ。棚に入らず床に積まれた本も  
沢山ある。司書さんもないので、授業を受けられなくなった生徒たち

の溜まり場になっている。保健室登校ならぬ旧図書室登校といったところか。中でも『やばいやつ』と噂になっているのが、今、可奈の目の前で微笑んでいる少年だった。

なぜ『やつ』に絡まなければならないのか、と可奈は凶悪な気分になりかける。しかし、自ら進んで来た以上誰にも文句は言えない。

可奈が大会に既成台本を使うと言い出したのが、そもそもの始まりだった。部員が書いた台本で大会に出場するというのは、演劇部ができて以来の伝統だ。それをないがしろにするなんて、と憤った部員が次々と辞めてゆき、残ったのはたったの五人。それでも方針を戻すつもりはなかった。プロが書いた台本を使えば、必然的に舞台の完成度も高まる。勝つためにはその力を借りることが必要だ。過去に創作台本で勝ち上がったことを引つ張り出す部員もいたが、それは朝子先輩というべらぼうに巧い先輩がいたからだとはねのけた。

可奈が入部したとき、先輩は三年生だった。彼女の演技力が別格であることは素人目にもわかった。視線ひとつひとつが憂いを帯び、媚びを含み、怒りに震える。数え切れないほどの感情が溜息に宿る。

彼女の演技をみていると、可奈はいつも一本の綱の上に立たされているような気分になった。全身の神経を張りつめ、壊れる寸前のところで怒濤のように台詞を吐き続ける。芝居が佳境に入ると、彼女の目はしばしば何も映さなくなった。クライマックスの瞬間は、身体が砕け散ってしまうのではないかと思うほどのエネルギーがほとばしった。そういう演技をする人だった。

最後の大会の後、先輩は学校を辞めてしまった。俳優養成学校に入っただのではないかと言われているが、よくわからない。三年生なんだから最後までいればよかったのに、と部員そろって口を尖らせた記憶がある。

今、そこまでの技量を持つ部員はいなかった。そもそも、演劇部ができてから今まで、勝ち上がったのは朝子先輩がいた三回だけなのだ。演

技で追いつけないなら、今まで重視してこなかった台本や音響や——そういう裏方の仕事に力を入れなければ勝ち上がれるはずがなかった。しかし、「台本なら旧図書室にあると思うけどね」という担任の言葉につられてここまで来てしまったのは、勇み足だったというほかない。『やばいやつ』は、想像以上に『やばかった』。

「きみ、演劇部だよねエ？」

細く、妙に間延びした声でした。決して弱々しいわけではない。大木に絡みついた蔓がやがて養分を吸い尽くしてその木を殺してしまうように、か細い中にも独特の強さが窺える。

「どうして」

振り向くと、積み上がった本の群に埋もれるようにして少年が座っていた。腕を伸ばして大欠伸をしている。ずっと床で寝ていたらしい。半袖から伸びる腕に筋が浮き立っていて、同年代の女子よりもよっぽど華奢で不健康そうに見えた。鉛のような淀んだ光り方をする目で『やつ』だとわかった。

「ずっとここにいとさ、暇なんだ」

少年が近くの棚から地方紙を取り出し、放り投げる。可奈にも見覚えがあった。二年前に関東大会に進出したときの記事に、部員の顔写真が載っている。

「……暇なら、出れば。授業」

「僕は病気」

「何の」

少年がうっすら笑った。聞こえなかったふりすらしないのが余計に腹立たしい。

「で、ホンは見つかったの」

どうして、と訊こうとしたが、少年は返事を待たずに、

「やめたらア」と笑う。

「何で」

「勝つためにやる公演なんて、上手くいくわけがないって」

またそれか、と可奈は大げさに溜息を吐いた。創作台本を推していた部員からも散々言われたことだ。

「綺麗事言うけどね。じゃあ何のために大会に出るのよ、そんなの発表会でいいでしょ。勝手なこと言わないで」

演劇部員でもなくせに、と付け加えると、少し間が空いた。少年は隣に座ると、もったいをつけるように片足だけ伸ばして言う。

「創作はしてるさ。小説のね」

反応が遅れた。そんなことをしていたのか。

「どんな。読ませて」

「無理だよ、まだ構想段階。頭の中にあるんだ」

「じゃあ書いてないの、一枚も？」

「一枚どころか、一文字だってね」

「ふざける？」

「すごく真面目」

聞く？ と、絡め取るような独特の声で訊ねられ、可奈は思わず頷いた。そして少年が語り始めたのが、あのいかれた話だったというわけだ。まず、大きくて暗い穴があるんだ——。

ひどい動悸がしている。こいつ、頭おかしい。そう思うのに、足が震えて逃げられない。少年は可奈の様子に気付かず、

「あア、書こう、君に話してたらなんだか書ける気がしてきた」

とそこらじゅうに散らばった紙に何やら書き始めた。瞬く間に増えていく汚い平仮名をなんとか解読して、また震え上がる。夢見がちだとかご都合主義だとかではない。それ以前の問題だ。とにかくおかしい、支離滅裂で話を追うことすらままならない。先ほどの話と同じ調子で、白

い鳥のまわりで起こった出来事が延々と綴られている。黄色い星がしほみ、じいさんの携帯の充電が切れ、月が三回転半して乳母車が土手を猛スピードで走り……と、こんな具合に何行も埋められてゆくのだ。平仮名だけで書かれているのもまた異様だった。

以来、少年は毎日のようにそれを書き進めるようになった。可奈が来るたびに「好事家だねエ」と自分の家へ招き入れるようにドアを開き、再び書き物に没頭する。

台本が決まり、夏休みが始まったも、可奈は旧図書室へ通い続けた。少年は、壁に爪を立てて引つ掻くように、がりがりと鉛筆を走らせた。周りに積み上げられたおびただしい数の紙に溺れながら、到底小説とは言えない粗末な文章を書き続けた。激しいが危うい、心許ないのに力強い。『勝つためにやる公演なんて』という声がこめかみの裏にこびりついていた。

誰にも評価されない話を、なぜ書いているのか。

木々がスローモーションのように揺れている。風の重さに耐えかね、ざざざと不穏な音を出す。雨雲に覆われた空は、細い針を刺しただけでたちまち崩れてしまいそうだ。可奈は、休憩時間中の美由紀の言葉を繰り返し思い起こしていた。

『前に話したあいつね、朝子先輩の弟なんだって。先輩が病気になる前からふさぎこんでるらしいよ。シスコンだよね』

雨音が聞こえ始める。音の粒は瞬く間に集まり、大音量になった。

「あんたの姉ちゃん、朝子先輩だってね」

鉛筆の動きが止まった。返事はない。千秋楽の拍手のような激しい音だけが聞こえてくる。

「病气って聞いた」

「……骨が出てきたんだ」

随分と間があった後、ぼつりと少年が言った。

「肩甲骨のあたりから二つね。羽が生えたみたいだったなア。綺麗だった」

背を向けたまま、饒舌になってゆく。

「でもそんな状態じゃア演劇なんてできないからね、手術をしたんだ。けれど、……あア君知ってる？ 背骨に大きな神経があるの。そこを傷つけてね、下半身が動かなくなった」

「——」

「物語が必要なんだ。何で自分が病気になるのか、演劇をやめなきゃなんなかったのか、納得するためのね。あさ姉は壊れた、穴は彼女も家も壊したよ、どこまでも終わりがない、ない、真つ暗な穴に落ちていくばかりだ。皆のために書かれたんじゃ駄目だ、お安いハッピーエンドじゃない、彼女のためだけに書かれた物語じゃアないと……そうでもしないと納得なんか、できない、できない、できないんだよ……」

啜り泣く声が聞こえた。細い腕の下で紙がぐしゃぐしゃになり、鉛筆が机に突き刺さったまま震えている。うなじは真つ赤になり、肩はびきびきと音が鳴りそうなほど強ばっている。

啜り泣きはやがて号泣になり、雨音に紛れた。

なぜ、審査発表直前のあの瞬間に見つけたのか、可奈にもわからない。ただ、見つけた。二階席、帽子をかぶり髪も伸び放題になってはいたが、紛れもなく朝子先輩だった。慌てて客席から立ち、二階へ駆け上がる。

「可奈ちゃん？」

車椅子に乗った先輩が目を見開いた。彼女の膝の上にある分厚い紙の束を、可奈はよく知っていた。

「それ、弟さんの」

先輩が「知ってるの」と頬を震わせる。

「ラストがこの場所だったの。穴に落ち、ごちゃごちゃした世界に疲れた白い鳥は、劇場に降りたって目をつむるの。結局、死んだのか眠ったのかはわからなかったけれど」

二度、深く頷いた。言葉が見つからず、

「出ましようか」

とだけ言う。

「悪いわ、結果見たいでしょう。車椅子なら自分で動かせるから」

「良いんです、そんなの。そんなの……」

何度もそれだけを繰り返し、車椅子を押す。重い扉を開けると、白い光が差し込んできた。

朝子先輩は泣いていた。震えていてもどこか大きな力を感じさせる、あの少年によく似た泣き声を漏らしながら。